

慶應義塾大学教授 小嶋 華津子先生 受賞コメント

このたびは歴史ある櫻田會奨励賞を受賞することができましたことを、大変光栄に思っております。まずは、これまで日本の政治学の発展に尽力してこられました櫻田會の関係者の皆様、そして先生方に、改めて敬意を表しますとともに、心から御礼申し上げます。ありがとうございます。

今回ご審査いただきました『中国の労働者組織と国民統合』は、修士課程に入学した 1993 年からかれこれ四半世紀以上をかけて、試行錯誤しながら研究してきたものの暫定的な結論でございます。非常に長い時間を要してしまいましたが、この間、指導教授である國分良成先生をはじめ、多くの先生方、同業の方々のご指導とご支援を賜りました。この場を借りてお礼を申し上げます。

これだけ長い時間をかけて出版にこぎ着けたとき、ひとつ意外な発見がございました。それは何かと申しますと、執筆中は、「これが本になったらさぞかし気分が爽快になるだろう」と思っておりました。しかし、実際はそうならなかったのです。ぎりぎりまで校正し、ようやく出版された本を手にした瞬間、爽快感どころか暗澹たる気持ちが重く心にのしかかってまいりました。研究対象の面白さを十分に論じ切ることができなかったという思い、自らの研究者としての小ささ、未熟さを改めて感じました。研究者としての限界を露呈しながらも、前に進んでいかなければならない。その苦しみのようなものを、今実感しているところでございます。

ただ、非常に嬉しかったのは、中国研究という分野における挑戦の成果が政治学の賞をいただけたということです。私は中華人民共和国史を勉強しております。この分野は、歴史学を専門とする方々からは、例えば「資料の読み込みが浅い」とか「問題の立て方に予断が多い」とか、さまざまなご批判を受ける一方で、政治学を専門とする方々からは、「これは中国という特殊な事例の記述にすぎない。もっと普遍的なモデルにひきつけて論じてこそ意味がある」というようなご批判を受け、なかなか居場所が見いだせぬ状況にありました。

そうした中で、資料から立ち現れる中国の指導者や庶民の生き様や政治社会のダイナミクスと、政治学の理論とを、どのように接合すればよいのだろうか悩んだ末に、現地にとって重要なコンテキストをすくい上げながらも、普遍的真理の輪郭を探ることを目指しました。その現時点での答えが本書でございます。正直なところ、この問いは未解決のままであり、何らかの事象を、さまざまなバイアスの上に構築された政治学の方法論を用いて論じることに、今なお躊躇を感じている状況です。

とは申しましても、今回、政治学の権威ある櫻田會からひとつの評価をいただいたことは、迷いつつ歩んできた私にとってこれからの大きな糧になることと思います。櫻田會が引き継いでこられました「不偏不党の立場で政治学を振興する」という理念を、私も能力不足ながら引き継ぎ、中国研究を通して政治学に何らかの発信ができますことを願っております。このたびは本当にありがとうございました。